



ユーгент・フィルハーモニカー  
第6回定期演奏会

2012年3月24日(土)

開演 19:00 (開場 18:00)

文京シビックホール 大ホール

L.v. ベートーヴェン 交響曲第2番 二長調 Op.36

— 休憩 —

E. エルガー 交響曲第1番 変イ長調 Op.55

※開演中は携帯電話の電源をお切り下さい。

※他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

## ご挨拶

本日はユーгент・フィルハーモニカーの第6回定期演奏会にお越しいただきありがとうございます。  
2011年3月19日。震災によって全ての日本人が明日を見失い塞ぎこんでいた最中、我々は演奏会を開催いたしました。暗闇に包まれた街では殆どの演奏会が中止され、音楽が鳴り響くことをやめてしまった世界。そこで我々が目の当たりにしたのは、乾くように音楽を求めホールに集まった沢山の「人間の姿」でした。このような時代にあって我々は「音楽で何をすべき」か。その答えはそこに厳然と示されていたのです。  
あれから1年。時代がどのように変わろうとも大切なモノは見失わず、これからもユーгент・フィルだからできる音楽を皆様にお届けして参ります。明日を生きられなかった者のために「明日」を力強く生きていけるように。日常という一見有り触れた「奇跡」をもっと輝かせられるように。  
今回は2つの交響曲を取り上げます。その素晴らしい内容を考えると不当といつていいほど、演奏機会の少ない作品です。聴覚を失い始めたベートーヴェンが絶望の中に見出した「希望」、そしてエルガーが求め続けた高貴で純朴な「英雄」の姿。このような時代だからこそ雄弁に響く音楽を、本日は最後までごゆっくりお楽しみください。  
最後になりましたが、今回ご指導いただいた田中一嘉先生、各方面でご協力いただきました関係者・スタッフの皆様、そして本日で来場の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

ユーгент・フィルハーモニカー代表 安斎拓志

## 楽団紹介

Jugend Philharmoniker (ユーгент・フィルハーモニカー) は、財団法人「日本青年館」の音楽行事(オーケストラ・フェスタ、全国高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユング・オーケストラ・ヨーロッパ公演)に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである。選抜オーケストラが母体となっているため、メンバーは様々な大学オケ出身のプレイヤーが揃っている。現在、団員約80名を越えるオケにまで成長し、定期演奏会を中心とした活動の他に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、その他、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。  
音楽的に人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること(≠プロオケには出来ないこと)」を追求することを理念としている。



## 指揮者紹介

田中一嘉 Kazuyoshi Tanaka

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。

指揮を故斎藤秀雄、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。コントラバスを江口朝彦、堤俊作の両氏に師事する。在学中より同大オーケストラ定期演奏会、オペラ公演等を指揮し、故斎藤秀雄、森正、秋山和慶の各氏及びブロードス・アール氏、河里予俊達氏、フランコ・フェラーラ氏らの指導を受ける。学外では、日本オペラ協会、長門美保歌劇団、東京アカデミー合唱団指揮者として、数多くのオペラ、合唱曲、特に宗教音楽分野での実績を積む。76年、大学在学中に第4回民音指揮者コンクール（現東京国際音楽コンクール）入選。奨励賞受賞。卒業後、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮者。群馬交響楽団指揮者を歴任。これまでに、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、九州交響楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、オーケストラ・アンサンブル金沢等、日本の主要オーケストラを指揮する。92年にはヤナーチェク春の音楽祭（チェコ・オストラヴァ）にてヨーロッパデビュー。95年にはカルロビ・ヴァリ交響楽団を指揮。00年ドイツ・ロットヴァイル夏の音楽祭。01年ベルリン日本週間での公演。03年ウィーン・ムジークフェラインザールでの日墮合同第九演奏会等その活動は多岐に及んでいる。88年より昭和音楽大学講師。



## 活動紹介

2011年	3/19	第5回定期演奏会（めぐろパーシモンホール）	
	3/29	修了式（デイ・ホーム芦花）	
	7/3	訪問演奏（介護付有料老人ホーム アミーユ成城南）	
	8/14	AUNJ クラシック オーケストラとの共演（双葉盆踊り大会 in 騎西）	
	9/19	敬老の集い（特別養護老人ホーム しらさぎホーム）	
	9/19	訪問演奏（やさしい手 デイ・ホーム川口）	
	9/22 - 25	第4回農村プロジェクト（長野県上田市武石）	
	10/16	訪問演奏（障害者支援施設 きずなの里）	
	10/30	文化祭（世田谷区特別養護老人ホーム 芦花ホーム）	
	12/3	第3回室内楽演奏会（団内）（大田区民ホール・アプリコ 小ホール）	
	12/25	クリスマスコンサート（介護老人保健施設 ひかわした）	
	2012年	1/7 - 8	合宿（山中湖畔荘 ホテル清溪）
		1/14	訪問演奏（デイ・ホーム芦花）
3/24		第6回定期演奏会（文京シビックホール）	

## 依頼演奏

ユーгент・フィルハーモニーでは学校・老人ホームなどの福祉施設や、その他各種イベントなどでの依頼演奏を受け付けています。詳しくは当団 Web サイトをご覧ください。

Web サイト <http://jugend-phil.com/>

ベートーヴェンの交響曲といえば“英雄”、“運命”、“田園”、“ベト7”、“第九”…  
7番以外は標題付で皆さん一度は必ず耳にしたことがある名曲ばかりである。

何の分野においても前後に特別人気のある作品があると、間に挟まれたものはそれ自身にどんな魅力があろうとも、とかく影に隠れがちになる。この交響曲第二番も例外ではなく、その不幸な境遇から他の交響曲に比べても演奏機会は少なく、知名度も高くない。

ベートーヴェン以前の作曲家（ここではハイドン、モーツァルトを例に挙げる）の交響曲は、精神性や文学性の面で現在私たちが感じているほどの大きな意味は特に持っておらず、聴衆が楽しめるような少々気楽なものとして存在していた。

そもそもオペラの序曲として演奏されていたものがやがて独立してシンフォニアと呼ばれるようになり、それをハイドンが現在に通じる4楽章形式に整えモーツァルトがその形式を発展させたものが交響曲である。両作曲家共に交響曲を量産した（ハイドンに至っては生涯で104もの交響曲を作曲した!）。しかしベートーヴェンが作曲した交響曲の数はわずかに9曲である。数こそ少ないものの彼はその9曲に渾身の力を込め、大きな意味を付与している。彼が交響曲で起こした革命の影響は大きく、後に続くブラームス、マーラーなどの作曲家は常にベートーヴェンの作品が頭の片隅にあり、時には苦しみを受けながら（ブラームスは自身の交響曲第一番の作曲に21年もの歳月を費やした）、さらに交響曲を発展させた。そこには「ベートーヴェンの第九を超える作品を」というある種の強迫観念があったようだ。

#### ■作曲の経緯

この曲は1802年にウィーン郊外のハイリゲンシュタットで作曲された。

ベートーヴェンについて幾ばくかの知識をお持ちの方ならお気づきかも知れないが、ハイリゲンシュタットといえばベートーヴェンが聴覚を失いつつある中で遺書を書いた村であり、遺書を書いた時期とこの交響曲を作曲した時期は合致している。

言うまでもなく音楽家にとって聴覚とは他のどの感覚よりも大切なものである。だんだんと世界が静かに遠くなっていく中で彼が感じた絶望は筆舌に尽くしがたい。この時ベートーヴェンは31歳、作曲家としての明るい将来に想いを馳せていただろう。

しかしそのような人生において致命的な出来事があったにも関わらず、この第2番は全楽章を通してとても明るく、躍動感のある作品に仕上がっている。一体なぜなのだろうか。

彼が書いた遺書は2人の弟に宛てたものである。その一部を抜粋する。

「僕の側に立っている誰かに遠くから響いてくる横笛の音が聞こえているのに、僕には何も聞こえなかった時、それはなんたる屈辱だったろう。たびたびのこうしたことで、僕はほとんど絶望し、もう少しのことで自殺するところだった。

——しかし彼女が——芸術が——僕をひきとめてくれた。ああ、僕には自分に課せられていると感ぜられる創造を、全部やり遂げずにこの世を去ることはできないと考えた。」

新編ベートーヴェンの手紙（上）小松雄一郎編訳より

ここから読み取れるのは彼の精神の強さ、そして音楽に対する使命感と意思の強さである。そしてこの遺書を境に、彼は現代にまで語り継がれる名曲を次々と生みだしてゆくのである。この遺書は病に悩まされていた過去の自分に対する決別であり、これからの生と創作に向けた新しい一歩であるに違いない。

#### 【第1楽章】

この交響曲の主音であるD音を堂々と2回、堂々とした始まりの序奏を伴うソナタ形式のこの楽章は終始溢れんばかりにみなぎっている生命力の鼓動と躍動感を失わない。聴覚を失いつつある人物が書いたとは到底思えないほどの生命の滾（たぎ）りを感じる。

### 【第2楽章】

粗野で無骨な野人が書いた音楽であることを忘れてしまうほどに美しく、しかし素朴な旋律がこの楽章の主題だ。この旋律の美しさは彼が生涯作曲したものの中でも他の追随を許さないほどである。その証拠にこの旋律には後に歌詞が付けられ、歌曲に編曲されている。

### 【第3楽章】

スケルツォには諧謔（かいぎやく）、冗談という意味があるがこの楽章はまさにその名にふさわしい曲になっている。慣例的に第3楽章にはメヌエットをおくのが決まりであったが、ベートーヴェンはこの曲で交響曲史上初めてスケルツォを第3楽章に置いた。これ以降、彼の交響曲の第3楽章にはスケルツォが置かれることとなる。

### 【第4楽章】

曲全体を通して音符が快活に跳びはねるようで、それがこの楽章の特徴だ。

軽快な音楽ではあるが彼らしい風格を感じさせる箇所もあり、両者の絶妙なバランスがこの曲を形づくっている。そこには音楽家として使命を全うしようとしているベートーヴェンの確固たる意思が見られる。

(aichanjp)

## E. エルガー： 交響曲第1番 変イ長調 Op.55

日本国内でエルガーの交響曲第1番が演奏されることは稀で、知名度も残念ながら低い。しかし初めてこの曲を耳にする方も冒頭の主題を聴いていただければ、行進曲《威風堂々》第1番のイメージに代表される「エルガーらしさ」を感じることができるだろう。

この旋律はモットー主題というより、ドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナーが楽劇に用いた特定の人物を表す「ライトモチーフ」のように扱われる。ワーグナーがイギリスで絶大な人気を誇る時代を過ごしたエルガーにとってその存在は大きく、和声やオーケストレーションにもその影響が見て取れる。英雄の行進とでもいうべきこの主題は、様々に変容しながら各楽章に何度も登場していく。

### ■ 1楽章冒頭に表れるモットー主題（ライトモチーフ）

#### Andante. Nobilmente e semplice.



このモットー主題には「Nobilmente(高貴に)」という指示が書いてある。エルガーの作品に頻繁に使われる発想標語で、英国紳士の崇高な精神や大英帝国の威厳を感じさせるような壮麗な音楽には必ずこの言葉が登場する。この「高貴さ」に対する憧れこそが、「エルガーらしさ」の源泉なのだろう。エルガーが交響曲第1番を完成させたのは1908年、51歳の時のこと。マンチェスターでハンス・リヒターの指揮で初演され大成功を収めた。聴衆からの人気は圧倒的で、初演から僅か1年の間に国内外で約100回(!)演奏された。ヘンリー・パーセルが1695年に亡くなってから200年以上「空白の時代」が続いていたイギリス音楽の復活を強烈に印象付ける出来事だった。エルガーはイギリスの最も偉大なシンフォニストであり「交響曲の父」なのだ。

この交響曲の特筆すべき点は、一つ一つの主題の着想が非常にシンプルなことだ。例えば第3楽章冒頭に奏でられる叙情的な第1主題は、第2楽章で冒頭に表れた16分音符の素早いパッセージによる主題をそのまま8分音符に引き伸ばしたものだ。

■ 第2楽章 第1主題(上段)と第3楽章 第1主題(下段)

The image shows two staves of musical notation. The top staff is for the first theme of the second movement, marked 'Allegro molto.' in 2/2 time. It begins with a piano (*pp*) dynamic and includes a 'simile' instruction. The bottom staff is for the first theme of the third movement, marked 'Adagio.' in 4/8 time. It starts with a piano cantabile (*pp cantabile*) dynamic, followed by a piano (*pp*) dynamic, and ends with a crescendo (*cresc.*) marking. Both staves are in the key of D major.

演奏時間 50 分を越える長大な作品を最後まで楽しんでいただくために、この表題を持たない交響曲を「ある英雄の物語」として聴いてみてはいかがだろうか。英雄の旅立ちから帰還までを描いた一大叙事詩をユーゲントフィルはどのように表現するのか。最後までじっくりとお楽しみいただきたい。

【第1楽章】 Andante. Nobilmente e semplice 変イ長調 4/4 拍子 - Allegro 二短調 2/2 拍子  
序奏つきソナタ形式。冒頭、低弦が奏でる静かな足音と共に変イ長調のモットー主題が表れる。英雄の行進は次第に近づきフォルティッシモで勇壮に歩みを進めていく。アレグロの主体では変イ長調から和声学のセオリーに反抗した二短調となる。怒りや懊悩（おうのう）を感じさせる第1主題に始まり、シンコペーションが印象的な不安と嘆きに満ちたイ短調の第2主題へと続く。序奏から一転して英雄の人間臭い感情が吐露される。再び静かに表れるモットー主題を経て、展開部に入ると不気味な静けさの後に激動の嵐がやってくる。再現部から金管が咆哮（ほうこう）しくライマックスを築くまで怒涛のように音楽は進んでいく。静まった後には「Last desk only(ヴァイオリンからチェロまでの最後列の8人のみで演奏)」によるモットー主題が遠くから聴こえてくる、その調べと共に英雄は地平線の向こうに消えていく。

【第2楽章】 Allegro molto 嬰へ短調 1/2 拍子  
三部形式。16分音符の素早いパッセージによる闘いの音楽。中間部トリオでは対照的に自然を思わせる無邪気で可愛らしい旋律が木管や独奏ヴァイオリンによって歌われる、この場所を後年エルガーは「ここは川の流るに耳を澄ますように弾いてみて」とオーケストラに語っている。再現部で闘争的な旋律が戻ってくるが、音楽は次第に引き伸ばされそのまま第3楽章へと切れ目なく続いていく。

【第3楽章】 Adagio 二長調 4/8 拍子  
二部形式。冒頭から奏でられる第2楽章の主題が変容した叙情的な主題、闘争に対する慰めのアダージョである。後半部は弦楽器がいじらしいほどのピアノッシモを奏でる、傷だらけの英雄が心からの愛を歌う全曲の白眉（はくび）だ。過去に想いを馳せながら英雄は夢の世界に消えていく。

【第4楽章】 Lento 二短調 4/4 拍子 - Allegro 二短調 2/2 拍子  
序奏つきソナタ形式。序奏はバスクラリネットの不気味な導入に始まり、ファゴットとチェロのピッツィカートによってモットー主題が不気味に暗示される。再び「Last desk only」のモットー主題によって英雄の存在が暗示されるがすぐに否定される。主体アレグロは駆け上がるようにして付点のリズムが印象的な第一主題が表れ闘争の音楽となる。続いてブラームスの第3交響曲を思わせる英雄的な第2主題が高らかに歌われる。序奏に表れた不気味な主題は叙情的な旋律へと変容し、弦楽器が切なく美しいフーガを奏でる。コーダではホルンが揺るぎない決意を表明し、それに導かれるように弦楽器群の威光をまといながら英雄は再び帰還する。音楽はフィナーレに向かい加速していき、変イ長調の主和音によって英雄の物語は華々しく締めくくられる。



## ■ 次回演奏会のお知らせ

ユーゲント・フィルハーモニカー 第7回定期演奏会

2013年3月23日(土) 午後公演

於 すみだトリフォニーホール 大ホール

曲目未定

---

後日ご案内をお送りしますので、アンケート用紙にご連絡先をご記入ください

お問い合わせ

<http://jugend-phil.com/> (当団 Web サイト)

公式ツイッターアカウント

@jugend\_phil : ユーゲント・フィルハーモニカー